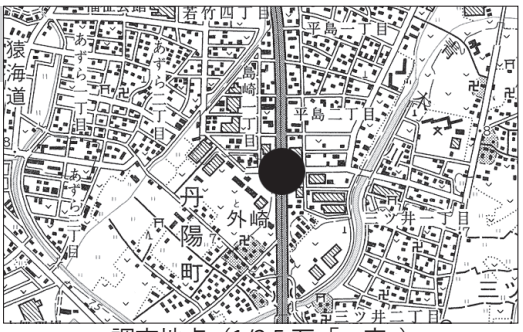
島崎（しまざき）遺跡

所　在　地　一宮市島崎地内
調査理由　名岐道路建設
調査期間　平成 13 年 1 月～ 3 月
調　査　積　2,000 ㎡
担　当　者　服部信博・宮腰健司・織部匡久



調査地点（1/2.5 万「一宮」）

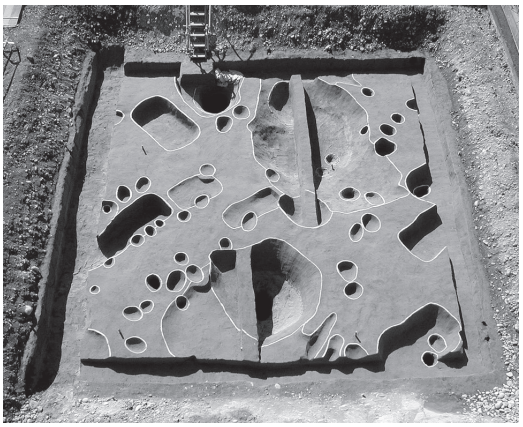
調査の経過　島崎遺跡は周知の埋蔵文化財包蔵地ではなく、名岐道路（県道高速清洲一宮線）建設に伴う範囲確認試掘調査の結果､新たに確認された遺跡である。本遺跡の発掘調査は名岐道路(県道高速一宮清洲線）建設の事前調査として名古屋高速道路公社より愛知県教育委員会を通じた委託事業として行った。同線は国道 22 号線名岐バイパス上の高架道路であるため、その橋脚部分のみの調査となった。調査面積は橋脚 10 基分、合計 2,000 ㎡で平成 13 年 1 月から 3 月にかけて実施した。

立地と環境　島崎遺跡は一宮市の南東部、名神高速道路一宮 IC の北側、一宮市島崎地内に所在する。調査対象である国道 22 号線は名古屋市と岐阜市を結ぶ主要国道であり、交通量の非常に多い幹線道路である。10 の調査区は全長約 400 mの工区に 30 ～ 40 mごと、一調査区約 200 ㎡で 22 号線の中央分離帯とその両側一車線分を囲む形で調査及び工事ヤードが設定されている。島崎遺跡は標高は 6.0 mから 6.5 m前後で自然堤防と後背湿地からなる自然堤防帯上に立地している。周辺の主な遺跡としては北西約 1.5 ㎞のところに縄文時代から古墳時代の遺跡として著名な馬見塚遺跡が、また南東約 2 ㎞には弥生時代から中世に位置づけられる元屋敷遺跡がある。

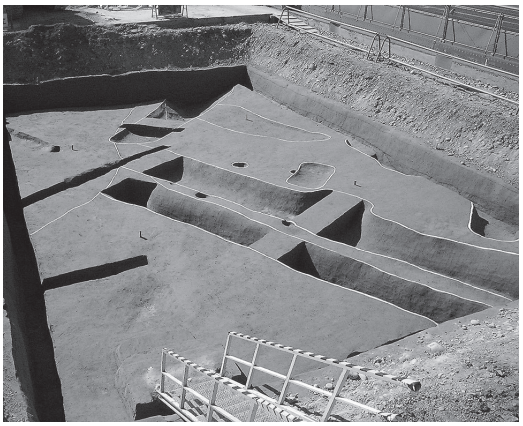
調査の概要　10 基の橋脚部分を、南からＡ～Ｊ区として順次調査を行っていった。

遺跡は、南側を流れる青木川に沿って北東から南西に延びる微高地上に立地しており、調査の結果、Ｃ～Ｅ区にかけてがもっとも高地部分で、北側ではＦ区からＪ区にかけてゆるやかに落ち込み、南側はＢ区からＡ区にかけてやや急に下がっている。

時期は江戸時代後期と中世期に大きく分かれる。江戸時代後期の遺構としては、Ｄ区以南において水田が検出されている。中世期の遺跡の様相は、13 ～ 14 世紀の居住域･水田から、15 世紀の墓域へと変遷する。13 ～ 14 世紀の居住域は、北側（Ｆ･Ｇ区）と南側（Ａ･Ｂ区）に、微高地の縁の沿って北東から南西に走る数条の溝によって区画されている。その内側にあたるＣ～Ｅ区では土坑・井戸・溝が見つかっており、居住域内を走る溝についても微高地の方向によって規制されている。またこの時期、居住域の外で低地部になるＨ～Ｊ区・Ａ～Ｂ区では、河川による砂の堆積が顕著で、部分的に水田が営まれている。15 世紀になると、ほぼ調査区全域にわたり、方形土壙によって構成される墓域になるが、この土壙の軸線も微高地と同方向を示す。　（宮腰健司・織部匡久）

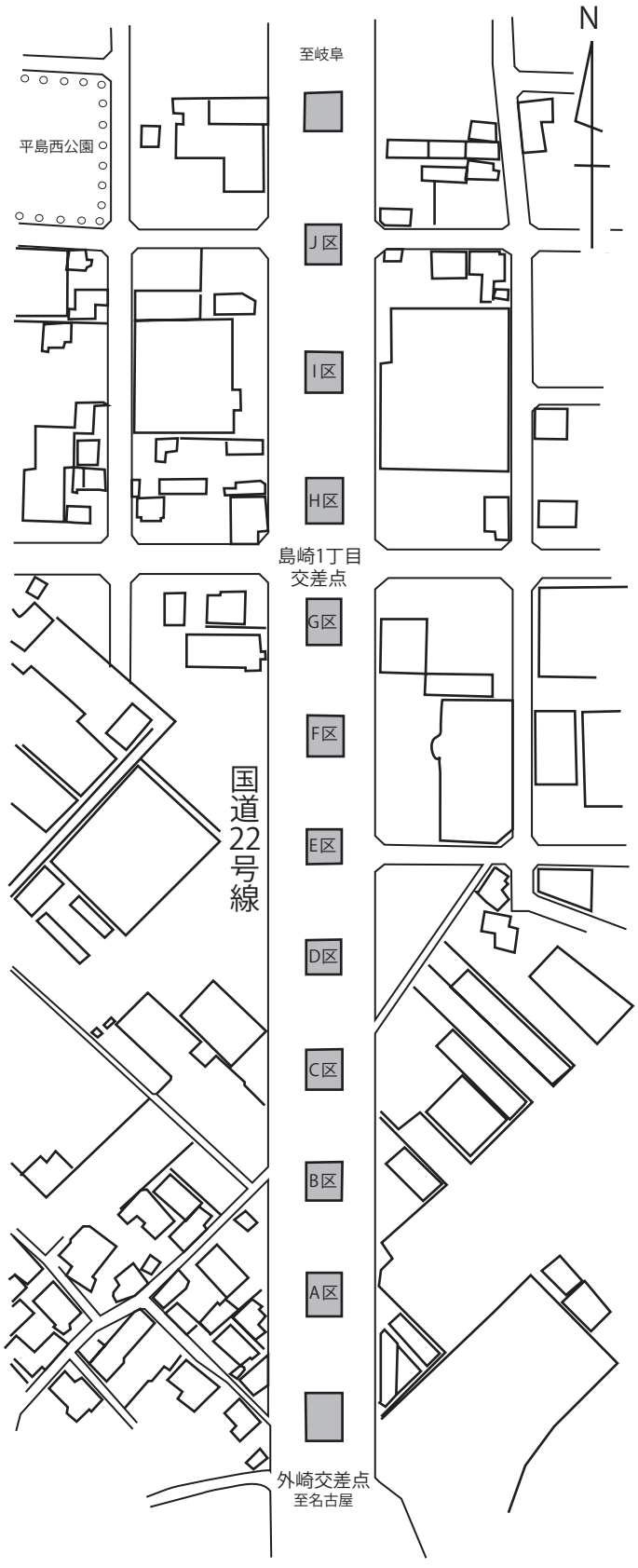


D区　全景　方形土坑墓群（北から）



Ⅰ区　全景（北東から）

J区　山茶椀出土状態（南から）



調査区配置図（1：2,500）